

# 脱植民地期アルジェのビドンヴィル事業を巡る居住実践に関する研究 (その2) : フェルナン・プイヨンのアルジェ三地区におけるムーア建築的特徴について RESEARCH ON DWELLING PRACTICE AROUND THE “BIDONVILLE (SHANTYTOWN)” PROJECTS IN ALGIERS DURING THE LATE COLONIAL PERIOD, PART 2 : AN EXAMINATION OF THE THREE DISTRICTS IN ALGIERS BY FERNAND POUILLON AS MOORISH ARCHITECTURE

松原 康介\*<sup>1</sup>

*Kosuke MATSUBARA*

The purpose of this study is to clarify the planning achievements of the three districts of Algiers by Fernand Pouillon by critically examining their characteristics as officially advocated “Moorish architecture”. Based on the conceptualization of “Moorish architecture”, the three districts are examined regarding to official resources and, Pouillon's autobiography ‘*Mémoire d'un architecte*’ which contains his concrete spatial philosophy and planning policy. As for the planning analysis, based on the various primary data, the plan of each district is modified to create a base map, and then the photographs of each part are compared and analysed item by item.

**Keywords :** *Diar es-Saâda, Diar el-Mahçoul, Climat de France, Jacques Chevallier, North Africa, Pierre Bourdieu*

ディアール=ッサアダ, ディアル=ル=マフスール, クリマ・ドゥ・フランス, ジャック・シュヴァリエ, 北アフリカ, ピエール・ブルデュー

## 1. 研究の背景と目的、方法

### 1.1 研究の背景

フランス植民地時代のアルジェリア (1830-1962) では、アルジェを中心に近代建築・都市計画が導入された<sup>注1)</sup>。建築史的、都市計画史的にみて、その様相は多種多彩といえるが、脱植民地期には、数世代に渡り居住してきた「コロン」と、先住民である「ムスリム」<sup>注2)</sup>との「共生」が喫緊の課題となっていた。ここで脱植民地期とは、「共生」を公約に掲げて市長に当選したジャック・シュヴァリエ (Jacques Chevallier : 1911-1971) が、1953年5月から58年5月までアルジェ市政を担い、「共生」型都市計画を推進していた時期を指す。前報<sup>26)</sup>で示した通り、「共生」型都市計画とは、ムスリム居住地として急拡大していたビドンヴィル<sup>注3)</sup>への対応を、実際には意味した。53年7月のCIAM第9回大会では、CIAMアルジェがマヒーューディンのビドンヴィルの調査成果を発表していた<sup>10)</sup>。

「共生」型都市計画の目玉として招聘されたのが、当時41歳であったフランス人建築家フェルナン・プイヨン (Fernand Pouillon : 1912-1986) であった。シュヴァリエ市長からの依頼は、3つの新住宅地区 (以後、「三地区」と略記) の計画と建設であり、ディアール=ッサアダ (Diar es-Saâda : 1954)、ディアール=ル=マフスール (Diar el-Mahçoul : 1955)、クリマ・ドゥ・フランス (Climat de France : 1959) の名で実現されている。後述のように、三地区のコンセプトは「ムーア建築 (hispano-maurisque) <sup>注4)</sup>」であった。ムーア建築とは、イスラーム王朝統治期 (711-1492年) のイベリア半島と、マグレブ地域 (アルジェリア、モロッコ、チュニジア等) とで発展した、ローマの要素とイスラームの要素の融合建築であるといえる。つまりプイヨンは、ムスリムを含めたアルジェリア人の生活空間として、地域に独

自の空間的特徴を計画に反映させることを試みたのである。

しかし、そうした試みが限界を露呈し、批判されることが少なくない<sup>注5)</sup>。カサブランカのビドンヴィル事業に携わった ATBAT のジョルジュ・キャンディリスによる集合住宅「蜜蜂の巣」では、中庭に見立てたバルコニーが、かえって新植民地主義的であると批判された上、住民自身により閉鎖されている<sup>注6)</sup>。また、同時期には社会学者ピエール・ブルデューがディアール=ル=マフスールの調査を行っており、元はビドンヴィル居住者であった住民がその「都市的生活様式」になじみず、自らの増改築によってビドンヴィル風の空間へと変容させてしまうという状況を批判的に報告している<sup>8)</sup>。

既往研究の動向をみると、まず、プイヨンの作品論として三地区を扱うモノグラフが多く存在し<sup>6)12)14)31)</sup>、図版を含む基礎資料として参照しうが、行政資料に踏み込んで考察してはいない。ザイナブ・チェリク (Zeynep Çelik) による一連の建築史的研究<sup>9)10)</sup>では、住戸レベル中心に計画的分析がなされ、またオスマン帝国とイスラーム・スペインからの文化的影響として中庭、柱廊、噴水、滝等の要素に言及がある<sup>注7)</sup>。ただし、チェリクの関心は文化的装いを伴う植民地主義の批判において一貫しており、地区レベルの計画図に基づきムーア建築的特徴を検証したものは言い難い。ブルデューの論考は、一義的には住民の居住実践に着目しての近代都市計画批判と位置付けられる。結果的に、三地区は、当初コンセプトである「ムーア建築」の定義に基づいて、具体的な建築・都市計画的成果として体系的に評価されたことはなかったのである。例えばここで、「全ての都市は植民都市である」というテーゼ<sup>注8)</sup>に立つなら、これらの既往研究は、植民地主義という大きな政治目的への批判的言説に留まることで、かえって計画の内容を見失ってきたといえないだろうか。

\*<sup>1</sup> 筑波大学理工情報生命学術院社会学専攻都市計画分野  
国際総合学類国際開発学専攻 准教授・博士 (学術)

Assoc. Prof., Faculty of Engineering, Information and Systems Division of Policy and Planning Sciences, University of Tsukuba, Ph.D.

## 1.2 研究の目的

そこで本研究では、プイヨンによるアルジェ三地区 (Fig.1) を対象に、公式に標榜された「ムーア建築」としての特徴を、立地、空間構成、装飾等の都市・建築要素、共生の理念、実現プロセスから批判的に検証することで、計画実績を明らかにすることを目的とする。

## 1.3 研究の方法

本研究は歴史的研究である。一次資料には、当時の市議会議事録、市の広報誌に掲載されたテキスト・写真・図版等、建築関連雑誌記事を用いる。また、当時アルジェに滞在していた日本の番匠谷堯二<sup>9)</sup>による雑誌記事<sup>9)</sup>があり、独自資料として用いる。市とプイヨンによる「ムーア建築」の標榜の事実については次節で確認する。

まず、ムーア建築に関する成書『アンダルシアにおけるムーア建築』<sup>9)</sup>を中心に既往研究を概括し、三地区の評価のための分析概念を構築し提示する (2章)。計画から実現のプロセスについては、アルジェ市の広報誌「ビュルタン(Bulletin Municipal de la ville d'Alger)」誌に掲載の市議会議事録、「ビュルタン」誌とその後継誌である「アルジェ・ルヴュ(Alger Revue Municipale)」誌<sup>10)</sup>の都市計画関連記事、建築関連雑誌「シャンティエ(Chantier)」の記事等から、事実関係を整理する (3章)。それを踏まえて、プイヨン自身による主観ではあるが、より具体的な空間理念や価値判断が含まれる、内容に富んだ自伝『石叫ぶべし』<sup>10)</sup>により補足する (4章)。計画的分析として、各地区の計画図を修正し、一次資料、各部の写真等を突き合わせて項目毎に検証し、共生のための建築的仕掛けを考察する (5章)<sup>11)</sup>。

## 1.4 アルジェ三地区に関する「ムーア建築」の標榜

「ムーア建築」の標榜が行われたのは、市の広報誌であるビュルタン誌 1953年5月号が最初である。シュヴァリエ市長の所信表明演説に続いて、プイヨンの似顔絵 (Fig.2) 付き紹介記事が掲載され、これよりアルジェ市内各所に2,000戸を計画すると報じられている。

具体的には、「この住宅は、きわめて合理的なコンセプトに基づいている。更に、真正のオーセンティックなオリジナリティがある。アルジェリアの地理に全て適応したためであり、またムーア建築にインスパイアされた中庭が付与されているためである<sup>12)</sup>」とされている。次のページではシュヴァリエ市長自身による三地区の解説記事があり、「オリジナルな、より厳密にはアルジェリア的なアパルトマンの要素は、ムーア建築の中庭を思わせる、開口されたロジヤである (ただし様式化される)<sup>13)</sup>」と期待を込めて語られている。

このように、市とプイヨンは、当初コンセプトとして「ムーア建築」をはっきりと標榜していた。様式化を前提とした中庭やロジヤといった要素に着目し、三地区を「ムーア建築」的特徴に基づき評価することには、一つの視点として妥当性があるといえる。

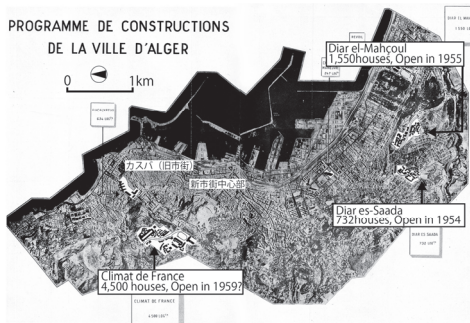


Fig.1 Location of the three districts (Alger Revue, 1956-5)



Fig.2 Portrait of F.Pouillon (Bulletin 1953-5)

## 2. ムーア建築に関わる概念構築

本章では、ムーア建築に関する既往研究の概括に基づいて、三地区の評価のための分析概念を構築し提示する。既往研究として、まず、概念化の目的のために十分な内容を有していると考えられる、マリアンヌ・バールカン(Marianne Barrucand)<sup>14)</sup>と写真家アヒム・ベトノルツ (Achim Bednorz) による成書『アンダルシアにおけるムーア建築』に着目し、その歴史と、立地や空間構成、建材、植栽、装飾等の特徴を、イメージ写真とともに抽出する (Fig.3)。

### 2.1 『アンダルシアにおけるムーア建築』の都市・建築要素

本書は、直接的な対象年代を710年から1492年とする編年体で記述されている。すなわちローマ文化を継承していた西ゴート王国(415-711; 首都トゥールーズ→トレド)における建築的蓄積を踏まえて、711年以降のイスラーム化時代を扱っている。1492年はアルハンブラ宮殿を擁する最後のイスラーム王朝であったナスル朝がレコンキスタにより滅亡した年である。扱われる地域はイベリア半島が多くを占めるが、今日のアルジェリア、モロッコ、チュニジアにおける主要都市、建築についても直接の解説があり、また文化的影響の起源としてシリアやペルシア等の西アジア世界にも言及がある。

本書の読み込みにより都市・建築要素を抽出し、以下のようにクライテリアとして項目化する。数字はFig.3のイメージ番号を示す。

**立地 (Location):** 対象時期のアンダルシアは、北アフリカを含む王朝の勃興とレコンキスタによる紛争地帯であった。建築や城塞の見晴らしのよい高所への立地は、政治的・軍事的観点から必須であった。例えば、10世紀のザフラー宮殿は山の中腹に位置し、カリフの宮殿を最上階におく段階的構成をとっていた。(①)

**眺望 (Prospect):** 立地の良さは優れた眺望をも導いた。アルハンブラが示すように、眺望景観的観点も建築の重要要素であった。(②)

**空間構成 (Composition):** ローマに起源を持ち西ゴートでも継承されていたと考えられる、都市の標準的な空間構成の要素として、中庭、柱廊、アーチ、市場、礼拝施設等があげられている。(③④)

**建材 (Material):** ローマ以来の建材であった石があげられ、組積造の柱、壁、アーチを構成したとされる。アルハンブラにもローマ起源の石造の水道橋があったことはよく知られている。より小規模の空間構成にはレンガも用いられた。瓦屋根は木造であった。(⑤)

**小スケール性 (Small Scale):** 柱廊や中庭といったローマ以来の要素も含め、ムーア建築においては全体的に建物のスケールが小ぶりで空間は稠密である。アルハンブラにおける柱廊は、ヤシの木と木陰からなるオアシスをイメージしたものと言われている。(⑥)

**水 (Water):** 水の確保には技術の粋が尽くされ、建物の随所に噴水や水路が導入されている。ザフラー宮殿の時代より、長方形の噴水が宮殿の入り口に配置された。水は自然の空調にも有用であった。(⑦)

**植栽 (Planting):** 多様な草花と果樹がアフリカのオアシスをイメージさせ、涼しさをもたらし目を楽しませ、果樹園でもあった。(⑧)

**装飾 (Ornament):** イスラーム建築に広くみられる装飾として、抽象芸術であるスタッコやモザイク・タイル、木彫彫刻、窓枠装飾がある。石造や木骨造の躯体の壁・柱に張り付けるもので、鮮やかな色彩を持つものもある。建物外観はこれにより独特の印象を強く与える。なお、アルハンブラの装飾は例外的に華やかであり修復も行き届いているが、アルジェのカスバ内や郊外に存在する施設なヴィラ等は、装飾はシンプルで白い壁面そのままの美しさがある。(⑨)

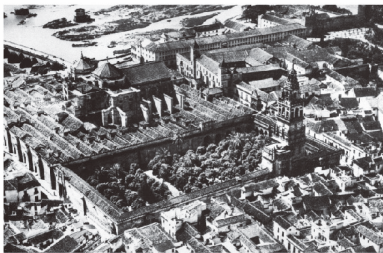




①Image of "Location" :  
City of Arcos on the hill



②Image of "Prospect" :  
Prospect from Madinat az-Zahra



④Image of "Composition(Court)" :  
Planted court of Mezquita



⑦Image of "Water" :  
Garden fountain of Generalife



⑧Image of "Planting" :  
Palm trees in the court of Alcazar, Seville



③Image of "Composition(Column)" :  
Arches of Mezquita



⑤Image of "Material" :  
Stone Wall of Mezquita(moved)



⑥Image of "Small Scale" :  
Thickly space of Alhambra



⑨Image of "Ornament" :  
Stucco of corridor, Alhambra

Fig.3 Example Images of "Moorish Architecture"<sup>5)</sup>

## 2.2 都市社会の多様性と共生の場所

シュヴァリエ市政における共生とは、一義的にはビドンヴィル居住者たるアルジェリア人への住宅供給を意味した。しかし、ムーア建築の織りなすミクロな空間それ自体が、多層的に成り立つ共生の場所としての側面を持っていた。とりわけグラナダ王国は巧みな外交政策でカスティーリャとモロッコとの間で均衡を保っており、その限りにおいて都市社会には平和的共生が具現化していた<sup>註15)</sup>。

パールカン、アルハンブラの内部においてもあらゆる社会階層

のための住宅があり、彼らが交流し、その共生を支えていた場所として、商店やハンマーム（公衆浴場）、工房、庭園といった施設を挙げている。噴水と水路がこれらの随所に設置され涼をもたらしていた。歳月とともに宮殿以外の建物は取り壊されたが、他の多くのイスラームの宮殿都市同様、アルハンブラもまた店舗と工房を備え、また貧者と富者が共存していたと、パールカンは論じている<sup>5)</sup>。

## 2.3 自然成長性としての空間形成プロセス

更に、定義の上で、要素を個別に抽出し概念化するだけでなく、それらが有機的に統合されていく空間形成プロセスにこそムーア建築の真髄があるとみるべきであろう。本書の結論部では、ローマ建築の基礎の上に、ビザンティンやサーサーン朝（ペルシア）の影響を受けて花開いたウマイヤ朝の建築文化が伝来し、文化交流の末に重層化された空間的結晶がムーア建築なのであると論じられている。

この点について、「人工都市」に対する「自然都市」の優位性を説いたクリストファー・アレグザンダーが、近年になってアルハンブラやマラケシュのメディナ（旧市街）の成り立ちに言葉を充てている。「そこには包括的シンメトリーは存在しませんが、そのデザインの部分部分には有機的かつ柔軟に敷地に適応する、驚くべき数の小さなシンメトリーが存在しています」。「そのプランは、1000もの組み合わせによる「センター」の驚異と、それに伴う、空間のあらゆる地点における美しい「局所的なシンメトリー」の秩序です<sup>2)</sup>。ここで言われている無数の「小さな（局所的な）シンメトリー」こそが、統治者の交代や文化の交流の中で、小さく不整形な敷地内に適応しながら繰り返される増改築によってできた空間的結晶、すなわち実現プロセスとしてのムーア建築の自然成長性だというのである。

三地区は近代建築であり、実際、特に急いで計画・建設されたため、この点は一義的には求めようもなく妥当性は低いと予想される。これはブルデューの知見を踏まえた批判的検証に用いる。

## 2.4 小括

以上から、本稿では、相互に深く関連する、「都市・建築要素」、「共生」、および「実現プロセス」を、アルジェ三地区のムーア建築的特徴を検証するための分析概念として用いる。

## 3. 3地区の計画経緯と実現プロセス

### 3.1 プイヨン招聘の経緯

プイヨン招聘の経緯は、「ムーア建築」の標榜を報じたビュルタン1953年5月号に掲載の市議会議事録に記されている。5月11日の議事録では、市長が、CIAMアルジェが調査を行っていたマヒーブディン等のビドンヴィルに4万人近い居住者がいることに言及し、年内までに1500戸の建設に着手すると宣言している。その上で、「マルセイユやエクス」のMRU（Ministère de la Reconstruction et de l'Urbanisme；復興・都市計画省）事業を担当してきた専門家が明朝にフランスから来るので、旅費として20,000フランを支出したいと要求し、承認されている。5月22日の議事録では、専門家がプイヨンであることが明かされ、プイヨンがアルジェにしばらく滞在し現地調査を開始すること、作業日程と報酬額案として、15日で1/2000プラン、30日で1/1000プランの作成を行い、報酬はそれぞれ10万フランとすることが審議、承認されている。

### 3.2 共生の確約

一方、「共生」の理念については、5月22日の議事録に関連する



やりとりがみられる。三地区計画の概要を説明した市長に対し、ムスリム系の市議会議員であったムスタファ・ブーシャコールが質問に立ち、「基本的に賛成するが、これらの地区では、どのようなカテゴリーの人々を居住者として想定されているか」と問うている<sup>注16</sup>。ムスリムの視点から「共生」政策の内実を問う質問である。シュヴァリエは、これに対し、全ての人々が住居に住むべきだし、また快適に住むべきであると前置きしたうえで、次のように回答している。

「ヨーロッパ人のため、またはムスリムのために特化した住宅を作ることはありません。そうでなく、ヨーロッパ人もムスリムも、あなたが知っている進化の程度に達し、一緒に住める混住住宅 (un habitat mixte) を作るのです。それぞれについて公平な割り振りがなされる予定です。」<sup>注17</sup>

その詳細については次報に譲る<sup>注18</sup>が、「進化」という条件付きで、「一緒に住む(cohabiter)」と宣言されていたのである。同月のビュルタン誌の記事でも、「これらの地区の入居者として、フランス人、ヨーロッパ人、ムスリムの全てが想定されている<sup>注19</sup>」と報じられた。ただし、居住者の具体的な割合が公的資料で明示されることはなかった。また、ディアル・ル＝マフスールがコロン地区とムスリム地区とに分離されていたという指摘が既往研究でなされてもいる<sup>注20</sup>。

### 3.3 三地区の実現プロセス

以後は、もっぱら広報誌(ビュルタン誌→アルジェ・ルヴュ誌)において三地区プロジェクトの進捗が報告されている。日付が彫られた最初の石材が置かれる定礎式が、ディアル＝ッサアダ(1953年8月4日; Fig.4)、ディアル・ル＝マフスール(1953年10月17日)、クリマ・ドゥ・フランス(1954年8月4日)と順次行われ、それぞれ、レオナル・ロジェ(アルジェリア総督)、モーリス・ルメール(MRU大臣)、ジャック・シュヴァリエ(国防長官兼アルジェ市長)<sup>注21</sup>ら政府要人が出席し、フランスの住宅政策における三地区の位置づけを明言する内容の訓示を行っている。その後、1954年11月にディアル＝ッサアダで、55年10月にディアル・ル＝マフスールで、賃貸による最初の一般向け入居が開始された。

クリマ・ドゥ・フランスについては、ビュルタン誌1953年11月号において、「未来のカスバ(le future Casbah)」として模型写真(Fig.5)が掲載され、翌年春には工事開始予定と紹介されていた。しかし54年1月、カスバの高台の裏手の立地で地盤の脆弱性が問題となっていると報じられている。その後の経緯はパイオンの自伝に詳しいが、地滑り事故により計画変更を余儀なくされることとなる(次章)。

### 3.4 共生を巡る地区関連行事

以後、三地区に関連した行事が折に触れてアルジェ・ルヴュに写真付きで報告されている。1954年8月4日の記念日<sup>注22</sup>には、竣工

間近のディアル＝ッサアダの現場でムスリム労働者のためのパーティーが行われ、伝統料理である羊の丸焼きが振舞われるなど、平和的な様子が伺える(Fig.6)。10月には、マンデス＝フランス内閣の内務大臣で対アルジェリア強硬派であったフランソワ・ミッテラン<sup>注23</sup>がディアル＝ッサアダを訪れ、シュヴァリエ、パイオンから案内を受けている。ミッテランの訓示は、「フランスの未来はアルジェリアにかかっている」とした上で、ビドンヴィル事業を引き続き支援するという内容であった。しかし直後から独立運動が激化する<sup>注24</sup>。

55年8月4日の記念日には、ディアル＝ッサアダにおいて、アルジェリアの伝統音楽、子供の運動会、花火等の催しが行われた。写真では、コロンの数が多く、ムスリムの子弟は散見されるといった様子である。10月のディアル・ル＝マフスールの入居開始時には、総督ジャック・スーステル(Jacques Soustelle; 1912-1990)が臨席し記念式典が行われた。写真は、スーステル、シュヴァリエ、パイオンらがディアル・ル＝マフスール内をコロン、ムスリムの群衆と共に闊歩する様子を伝えている。シュヴァリエは、サン＝テグジュペリの一節「ともに塔を築くように彼らを強制するがいい。そのときおまえは、彼らを同胞に変えることができるだろう<sup>注25</sup>」を引きながら、「共生」をアピールする訓示を行った。

### 3.5 小括

アルジェ市とパイオンは当初から「ムーア建築」を標榜していたが、一方でスピードが注視されていた。定礎式の臨席者からは三地区事業への本国政府の支援が読み取れる。「共生」については議事録に確認でき、広報誌でアピールされていた。一方で、「ムーア建築」の特徴も含め、計画の具体的な内容に踏み込んだ記事は多くなかった。

## 4. 自伝『石叫ぶべし』にみる三地区計画論と「ムーア建築」の特徴

ここでパイオンの自伝『石叫ぶべし』のテキスト分析を行う<sup>注26</sup>。4.1で、主として実現プロセスの実際を探る観点から、3章で概括された事績に肉付けする。4.2で、より直接的な空間論を抽出し、建築・都市要素に関する空間理念と共生の価値観を精査する。

### 4.1 自伝にみるアルジェ三地区の計画と実現の経緯

『石叫ぶべし』は、国民住宅金融公庫を巡る冤罪事件で服役中だったパイオンが、1962年に脱獄を試みるころから始まる。すぐカットバックし、エコール・デ・ボザールで学んだ青春期が語られる。ボザールでの指導教官は、戦前にウジェーヌ・モパン事務所でもルセル・ロッズ、ウラジミール・ボディアンスキーらと共にプレファブ리케이션の実装を経験していたウジェーヌ・ボードゥアンであった<sup>20</sup>。ボードゥアンが、MRUの仕事でマルセイユ旧港の戦災



Fig.4 Cornerstone of Diar es-Saada(Bulletin 1953-8)

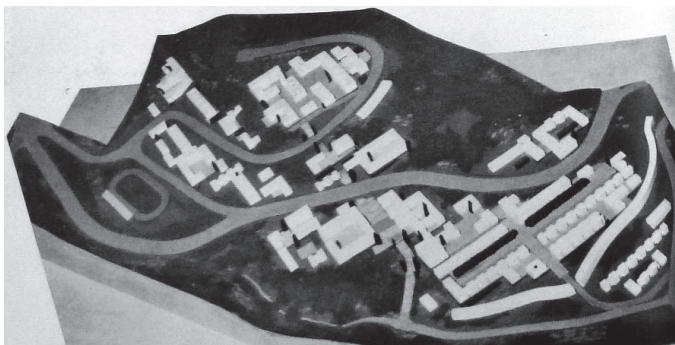


Fig.5 First model of Climat de France (Bulletin 1953-11)



Fig.6 Party for construction laborer in Diar es-Saada (Alger Revue 1954-8)

復興を担当していた関係でブイオンも参画した。しかしブイオンは、「ずっと前から私は材料に興味をもっていた。塗料の醜さ、ベトンの色を嗅かわしく思っていた。鉄筋コンクリートの時代は私にとって外観、外装、建物の上皮の問題を伴っていた」とあるように、当時の流行であった鉄筋コンクリートには馴染めずにいた。その志向性から、フォンヴィエイユ<sup>註27)</sup>の採石場の石工技術者ポール・マルスルー (Paul Marcerou) の知遇を得て、マルセイユ旧港の他、エクス、ラ・トゥーレット等の南仏一帯で石材の大量活用を可能とした<sup>27)</sup>。

1953年5月3日のアルジェ市長選挙の翌日、4日にシュヴァリエ自身から『タダチニアタシ シキウアルジェニオイデコウ』ジャック・シュヴァリエ、市長、国会議員』との電報を受け取ったとされる。その夜に郵便機でアルジェに飛んだブイオンは、早朝の空港で市長直々の出迎えを受け、車中で早速市長と会話を交わす。

「土地はありますか。市長さん」「あるとも、ないともいえます」「資金はありますか」「いいえ」「つまり、やる気だけは十分というわけですね」「はい」(中略)「市長という職にあれば、肝心なのはやる気ですよ。あなたがこの仕事の最高責任者なのですか」「アルジェの低家賃住宅(HLM)公団が責任者ですが、明日、私がその所長になります」「それは何よりです」

率直な会話の中で、市長は喫緊の課題がビドンヴィル住民のHLM (Habitation à Loyer Modéré)への住み替えであることを伝えている。さらに、ベルナル・ゼルフェスの高層住宅 (Fig.7) を見せながら、そのル・コルビュジエ風の高層建築は気に入らないのだと伝える。

午前中は「夢のように過ぎた」。ブイオンは、案内されたディアル＝ツサアダ(10ha)、ディアル・ル＝マフスール(15ha)の候補地のいずれにも感嘆している。昼食をとったシュヴァリエの自邸は18世紀末のアラブ式の伝統的ヴィラであった。コロノ貴族としてアルジェリアを知悉し、選挙では「圧倒的な強さ」を誇るシュヴァリエの清廉な人柄に魅せられたブイオンは、午後に案内されたクリマ・ドゥ・フランスの斜面地を前に、問題は技術的に解決できると断言した。

ブイオンに決定的な印象を与えたのは、正規のスケジュールを終えた後夕刻に訪れたカスパであった。ローマ時代に起源を持ち、柱廊道路が徐々に細分化されて形成されたスークを持ち、稠密居住を中庭によって支えている旧市街カスパと、自らが設計しようとする三地区との間に、「きずなが生まれようとしていた」というのである。事業体制として、元MRU大臣クロディウス＝ブティとアルジェの実業家ジョルジュ・ブラシェットの支援の下、マルスルーの石材をフォンヴィエイユから海路輸送する算段もつけた。夜の11時、シュヴァリエにより空港まで送られたブイオンは、一週間で最初の計画を作成することを約した。これで最初のアルジェ訪問は終了した。

ブイオンは約束通り一週間後にアルジェを再訪<sup>註28)</sup>し、最初の計画

となる図面100枚と3つの模型を市に提示した。廉価であることは市の最重要の要望であったが、一戸50万フランと当時の相場を大幅に下回った。そのため価格競争が起き、ゼルフェスら地元の建築家、不動産業者の不興を買い、脅迫を受ける程であった。

もう一つの重要な要望はスピードであった。「時間が相変わらず私の主な心配の種であった」。ブイオンは多忙を極め、毎週、パリ、アルジェ、マルセイユ間を移動し、機内泊は週3晩に達したが、「熱中と熱狂が私を支えていた」。建設現場には、「ここでの唯一の主人一期限内の完工」と書かれていた。結果として、最初の二地区については計画通りに実現し、公約は概ね守られたとしている (Fig.8)。55年8月には、聖ヨハネ教会の定礎式も行われた。

なおこの時点で、FLNの反乱は重大視されていなかったとある。2週間後のフィリップヴィルの虐殺をきっかけに、多くのコロノが事態の深刻さを悟ったのであり、それを受けて10月のディアル・ル＝マフスールでのアピールが行われたのである。この経緯からみると、53年5月の最初の依頼から数週間でなされた三地区の計画は、アルジェリー・フランセーズ的極右思想に毒される前の、シュヴァリエの「共生」理念にのみ忠実なものだったことを示唆している。

クリマ・ドゥ・フランスでは斜面地の排水工事は当初順調であり、ブイオンは水を小川や泉に用いることを考えるほどであったが、54年8月4日の定礎式の後、地滑り事故が発生した。担当の地質学者が自殺し、工事は中止され、計画も刷新されることとなった。「私の解決策に問題があったのである」と考えたブイオンは、「われわれは未だアルジェリア北部の建築様式しか知らない。私は南部への視察に出かけたい」と述べ、ジープでガルダイヤのオアシス集落群<sup>29)</sup>を訪問した。ブイオンはそこで、ビドンヴィル住民が離村する以前の農村の空間と暮らしについて、イメージを得たのである。こうして、地区の中核である大広場の計画が決まった。小店舗のある柱廊が連続するため、「二〇〇柱の広場」と住民に名付けられた。

ブイオンは、事務所、応接室も兼ねた自邸として、ディアル・ル＝マフスールに隣接した邸宅「ヴィラ・デ・ザルカード (Villa des Arcades)」 (Fig.9)<sup>註29)</sup>を購入し、その空間の中で日常生活を送った。

#### 4.2 「ムーア建築」的特徴に関わるテキスト内容分析

『石叫ぶべし』中、「ムーア建築」的特徴に関わるテキストを抽出し、Table 1を得た。これに基づき三地区の計画論を再構成する。

**立地**：「大きな天然のバルコニー」である高台が理想的と評価されている。見下ろす眺望もここから得られた。また、起伏のある街並みを導いた。これらはアルジェに固有の地形がもたらすものである。

**眺望**：「アルジェ湾」、「停泊地」といった海、また街並みや山（「アトラス山脈」）を見下ろす眺望が評価されている。また、「鐘楼のよ



Fig.7 Corbusian Apartment by Bernard Zehruss (post card)



Fig.8 Pouillon's team at a building site (Alger Revue 1954-3)



Fig.9 Picture of Villa des Arcades 30)



Table 1 Text of Mémoire d'un architecte (translated by Toru Araki 29) Underline for the criteria, Italic for direct quotation in 4.2.

<p>Text-1 p.136 市長との車中会話</p> <p>「HLMの建築家はゼルフスといいますが、彼をご存じですか」「知っております」「彼は全然アルジェに来ません。三年間に三〇〇戸の住宅を建設し、値段の上限を破るレコードを作りました。彼の作った家は気に入りません。とにかく見て下さい」。私たちは練兵場に沿って走っていた。<u>ル・コルビュジェ様式の並流の二つの棟が見えたが、気取った建物で、不調和な形通りの要素を備えていた。(小スケール) 不自然な日除け、不自然な高縁の列柱、わざとらしいまでに不均整を誇張している。(空間構成)</u>「どう思います」とシュヴァリエは訊ねた。「別に、市長さん」。</p>	<p>Text-7 p.168 カスバを語る</p> <p>歴史的なアルジェ、カスバのアルジェはトルコの占領の烙印を押され、<u>スペインのサラセンの建築様式の影響を受けた町である。(共生) 実際のところ着いた時から伝統建築として私が見出したものは、トルコ王朝の太守らによって建築された城壁と旧市街に残るセビリヤやグラナダなど後ウマイヤ朝の建築家が着想したバロック式の変化に富む可愛らしさだけだったのである。(空間構成)(小スケール) 幸福の町(ディアル=マフスール)と守られた約束の町(ディアル=マフスール)の団地の一部分はトルコ要塞の堂々たる壁で構成され、その内部が中庭、広場、庭園、陶物の舗石、柱廊、泉水、灌などによってスペインを思い起させるのはこのためである。(空間構成)(水)(植栽)石の壁にブーゲンビリアがはっている趣である。(建材)(植栽)</u></p>
<p>Text-2 p.137 ディアル・ル=マフスールの敷地を訪れて</p> <p>私は稲妻のような閃きに打たれた。平たい場所にとり囲まれた海を見下ろす大きな天然のバルコニー、理想的な空間が私の眼下に広がっていた。<u>(立地)(眺望)</u> 遠く、カスバが見えた。ヨーロッパ建築が侵蝕する無秩序の中に残された真物の町だった。建物はデザートテーブルの混乱のただなかでの舌触りのいい生クリームのような感触を保ち、白々と柔らかい影のなかに浮かんでいた。<u>(小スケール)(共生) 私はヨーロッパ人による征服を残念に思った。(共生)</u></p>	<p>Text-8 p.168 モダニズムとの対峙</p> <p>私の建築は抽象建築の不感無覚の連中、アンドレ・ブロック氏の雑誌の顧客である極端な形式主義建築家たちをめんくらわせ激怒させた。彼とその一党はこの石とこの装飾に憤慨した。<u>(建材)(装飾) 陰気な型枠を取り除いただけのコンクリートと冷え冷えとしてみるから悲慘な材料が流行の先端をきっていたのである。(建材) 私はこれらの偏見にみちた批判を軽蔑し、けつて流行デザイナーの忠告に従わなかった。</u></p>
<p>Text-3 p.140 カスバ散策にて</p> <p>この(カスバの)散歩の間、私の精神は、そこで私が見出したものによって異常に昂揚したのである。八世紀のトルコの要塞を見ているうちに、現代の形とより密接な関連をもった、もう一つのスケールが自分のものとなってきた。私は自分のなかに街の六階建の住宅やゼルフスの棟とは異なる異なった一つの新しい建築様式が生れるのを感じた。<u>(小スケール) かつてトルコ人によって占領されたことのある高地で見た建築物のおかげで、カスバと私のつくる町をつなぐさながら生れようとしていた。(立地)(共生) それは美しい石壁を伴った兵営や武器庫のどっしりとした建築であった。(建材)</u></p>	<p>Text-9 pp.169-172 ガルダイヤとクリマ・ド・フランス</p> <p>ムザブの町々、エル・ゴレアとチミムの廃墟、<u>椰子林の生粘土の建物はアルジェのアラバスクよりもよくこの国を理解させてくれた。(建材)(植栽) 長さ三〇〇メートル、高さ三〇メートルのファサードはアルジェリア南部産の絨毯のモチーフから着想を得たものである。(装飾)</u> 現代においておそらく初めて私たちは歴史的建築に人間を住ませたのだ。<u>(共生)</u> こうして集团的狂気の空気の中にもかかわらず、四年間の絶え間ない行動が五万人以上の住人を人間の名誉にふさわしく住ませるにいたったのだ。<u>(共生)</u></p>
<p>Text-4 p.152 ディアル=マフスール竣工後に(1)</p> <p>すばらしい視界が一八〇度の角度で海と街、そして山々や高地を露わにしていた。<u>(眺望)</u> 私は高さの違ういくつかの建物を建て、全体の配置の中心である市場の広場に鐘楼のような二〇階建の塔を建てて、この塔が他の建物を見下ろすようにしたいと決めていた。<u>(眺望)(空間構成)(小スケール)</u></p>	<p>Text-10 p.174 ヴィラ・デ・ザルカードからの眺め</p> <p>夏にはハミドゥは妻妾を別荘にひき連れてきた。私が事務所を置いたアーケード付きの大きなロジヤから、獲物を狙う鳥のように彼は停泊地を見張ったのである。<u>(空間構成)(眺望)</u> 海岸に接近しすぎる外国船を見つけると、港に走って出兵の指揮を取り、イギリスやスペインの不用意な船を追跡した。</p>
<p>Text-5 p.152 ディアル=マフスール竣工後に(2)</p> <p>この道路に沿って大きさや性格のさまざまに異なった広場が配置されていた。<u>(空間構成) 本当の高所にある庭で、様々な色の石をしいた舗道、泉水、芝生、散歩場が飾られ、大きな椰子の木、松、糸杉、現地の様々な種類の樹木が植わっていた。(立地)(建材)(植栽)(水) 刀の一突きのように全体を貫いて水が東から西に流れていた。最も急なところでは、いくつもの重なった小さい灌となって流れ落ちているのである。(水)</u> この人工の小川は市場の広場の下を通っていた。<u>(水)</u> この広場は私が画家のジャン・ショブレインに制作を依頼したモザイクで装飾されていたが、これは世界最大で三千平方メートルの面積をもち、同時に最も安価だった。<u>(装飾)</u> 一平方メートルあたり二〇〇フランしかかからなかったからである。 友人のエルベが最初に思いついたこのモザイクの絵は、雨の日には輝き、晴天の日には目立たなかった。生き生きとした図柄はアルジェ湾とアトラス山脈を見渡すすばらしく広大な眺めに疲れた目を休ませてくれた。<u>(眺望)</u> 小川は直径三〇メートルの円形の泉水に流れこみ、友人の彫刻家のアルノーの手になる海豚が細かい霧の吹きつけるなかで跳びはねていた。<u>(水)(装飾)</u> そして水面の一番高い所でこざれ処理された水を機械が再び押し上げ、豊かな泉によって作り出されるこの光景は、無限に繰り返されるのであった。<u>(眺望)(水)</u></p>	<p>Text-11 p.174 ヴィラ・デ・ザルカードに住んで</p> <p>この家はオレンジ、椰子、ユーカリ、糸杉の庭のなかでその純粋さを保っていた。<u>(空間構成)(植栽) ばら園と模範的な野菜畑に囲まれ、ブーゲンビリアに飾られ、夜は朝鮮朝顔の、夕方はジャズミンの香りが漂うこの家は石灰の白く厚い壁でつくられて、どっしりした外観をもっていた。(建材)(植栽) そこから二つの繊細な丸屋根と一風変わった煙突が突き出していた。(空間構成) アーチ形になった戸だけが彫刻で飾られていたが、内部は何ともいえず洗練されていた。(空間構成)(装飾) 手のこんだ石細工、大理石の舗石、円天井、三つのすばらしい中庭、そしてかつて女たちと客用に使われた庭、もちろん、いくつもの泉、ふんだんに七宝を使った陶製の舗石があり、噴水と白い鳩、雉子鳩があった。(空間構成)(水)(装飾)</u> 私が一軒の家をこれほど愛することはないだろう。いったんそこに入って扉が閉ざされると、私は外界から安全にまた完全に隔離されるのを感じた。<u>(空間構成)</u> そこで私はアラブ人の生活を学び、イスラームを知った。<u>(共生)</u></p>
<p>Text-6 p.160 ディアル・ル=マフスール竣工後に</p> <p>一年が過ぎた。ディアル=マフスールにはすでに人が住んでいた。ある年の八月三日、私たち知事、市長と私は、ディアル=マフスールの遊歩道を散歩していた。新しい工事場はかつてない最良の状態まで完成していた。 シュヴァリエの意志と工事監督のジャン・シュニヴェスの精力のおかげで、都市は完全にできあがり、すっかり掃き清められ、窓ガラスは洗われ、階段は清潔になっていた。各戸の床は磨かれてワックスがひかれ、冷蔵庫、レンジ、家具など台所の設備が入っていた。総体で一六〇〇戸、一八〇の店舗、市場が一つ、街路樹、街燈、泉水、灌、大理石と紅色に輝く陶製の舗石で舗装された遊歩道があった。<u>(空間構成)(建材)(小スケール)(水)(植栽) 幸福の町では、一日で五〇本の椰子の木を植えていた。半日とかからずに一〇〇年を経たオアシスがぞくぞく移植されたのである。守られた約束の町でも「椰子の木作戦」が展開され、二週間で前回の一〇倍が移植された。(植栽)</u> 知事と市長とは想像上の抽象の街の王たちのように、この一万人の住民のために建築された町を散歩していた。</p>	<p>Text-12 pp.181-182 ジェラル・アニング(ATBAT)との対話</p> <p>アニングは検討すべき皆さんの提案に絶望して市庁の最上階の自分の事務所に私を呼んだ。私たちは静かに理解をもって話し合った。私は彼らすべてより以上に彼らの成功を強く望んでいた。 「君は設計はどうやってやるの」とアニングは訊ねた。 私は彼に自分は建物を構成する個々の要素からは設計はしないと。私は「私は空間を構成するのだ。歩行者のために仕事をし、飛行家のためじゃない。自分の部屋の出窓から、あるいは客間から眺める人を考える。この想像の空間を散歩して、私が望む感覚を得られない時にこれに変化を加える。<u>(眺望)(小スケール)</u> まず私に現れてくるのはそういう想像的空間であるが、それを限る様々な幾何学的平面も浮かんでくる。建物のファサード、ポーチ、地面と庭で構成されるもう一つの重要なファサードも忘れてはならない。空間は壁、芝生、木々、舗石でとり囲まれる。すべてが重要になってくる。材料、戸や窓の割合は欠くことのできない調和の補助要素なのだ。」<u>(空間構成)(建材)(植栽)</u></p>

うな」高層建築は、地区内からの記念碑的なヴィスタを導いた。更に、滝の流れる光景、家の窓からの眺めも評価された。

**空間構成**：店舗と市場、「さまざまに異なった」広場、塔、柱廊、アーケード、遊歩道といった空間語彙が多用されている。これらは、「セビリヤやグラナダなど後ウマイヤ朝の建築家が着想したバロック式の変化に富む可愛らしさ」を構成する。建物には中庭や庭園があり、「隔離感」「取り囲まれること」に居心地の良さがあるとされる。丸屋根、円天井、アーチ型の戸、ロジヤといった建築要素が評価されている。一方で、「不自然な高縁の列柱」が批判されていることから、調和のとれた低めの列柱が評価されているといえよう。

**建材**：城壁のような石壁が評価されており、「様々な色の石」「大理石」「陶製の舗石」などのバリエーションがある。この他、オアシスの住宅の生粘土、石灰の白く厚い壁等が評価される。「石の壁にブーゲンビリヤがはう」風情は一例である。アンドレ・ブロックらの言説やコンクリートに批判的なことも、石への評価と位置付けられる。

**小スケール**：遠目に見た「カスバ」を、その手前の新市街と比較し「生クリームのような感触」と形容している。「可愛らしさ」という表現は、ここでも当てはまる。「高さの違ういくつかの建物」は、21階建ての鐘楼に見立てた高層棟との対照であり、中低層の混合した街並みを意味する。アルジェ都市計画局(Agence du Plan)<sup>注30)</sup>の部長として、「調整役」としての都市計画を職能としていた ATBAT 出身のジェラルド・アニング(Gerald Hanning)<sup>23)</sup>に放った言葉「歩行者のために仕事をし、飛行機のためじゃない」には、ヒューマンスケールへの信念が認められる。「ル・コルビュジェ様式の亜流の二つの棟」「ゼルフェスの棟」の批判は、小スケールの評価と位置付けられる。

**水**：噴水(泉水、泉)、小川、滝、の3つの用語が頻出する。とりわけ、ディアル=ツサダの作品論では、常に噴水の存在があげられ、地区全体を貫く小川と滝、円形の噴水に至るまでの流れが描かれて

いる。ヴィラ・デ・ザルカードの描写にも、多くの噴水が現れる。

**植栽**：椰子、松、糸杉、オレンジ、ユーカリ等、「現地の様々な種類の樹木」が評価されている。特に椰子は地域色が強く、郊外のオアシスから大規模に移植し、街路樹にも多く用いられている。この他、「芝生」や「野菜畑」、また庭園の植栽として、「ばら」「朝鮮朝顔」「ジャスミン」、及び「ブーゲンビリヤ」が評価されている。

**装飾**：「ムーア建築」的のみならず伝統的な装飾としては、ヴィラ・デ・ザルカードにおける「繊細な丸屋根」「手の込んだ石細工」「七宝(ガラスと金属)」「白い鳩、雉子鳩」等がみられるのみである。

「二〇〇柱の広場」におけるベルベル絨毯のモチーフを「ムーア建築」的のみならずどうかは判断の分かれる所であろう。装飾を嫌うモダニストに批判的であり、装飾そのものの必要性は主張されている。ディアル=ツサダでは、画家ジャン・ショフレイの彫刻が広場を、アルノーのイルカの彫刻が円形の噴水を、それぞれ装飾したが、いずれも現代芸術であって「ムーア建築」的とはみなし難い。

**共生**：ヨーロッパの侵略を残念に思い、文化の積層した「カスバとのきずな」を感じるピイオンが、「初めて歴史的建築に人を」「人間の名誉にふさわしく住まわせた」のだと肯定的に自己評価している。また、中庭を持つ自邸を「アラブ人の(公私感覚に根差した)生活」、ひいてはイスラームを体現したものと理解し、愛したとされている。

#### 4.3 小括

三地区の実現プロセスの鍵は、建設の廉価性とスピードを担保した南仏以来の石材の使用であった。予想されたことではあるが、アレグザンダーのいう自然成長性は、少なくとも本事業自体には、求めようもなかったといえる。一方で石材は、「ムーア建築」においても多用され、地区空間の独特の雰囲気を出す基本的な要素であった。要素別にみても、「ムーア建築」的特徴が目指されていたことは明らかである。唯一、装飾については妥当性が得られなかった。

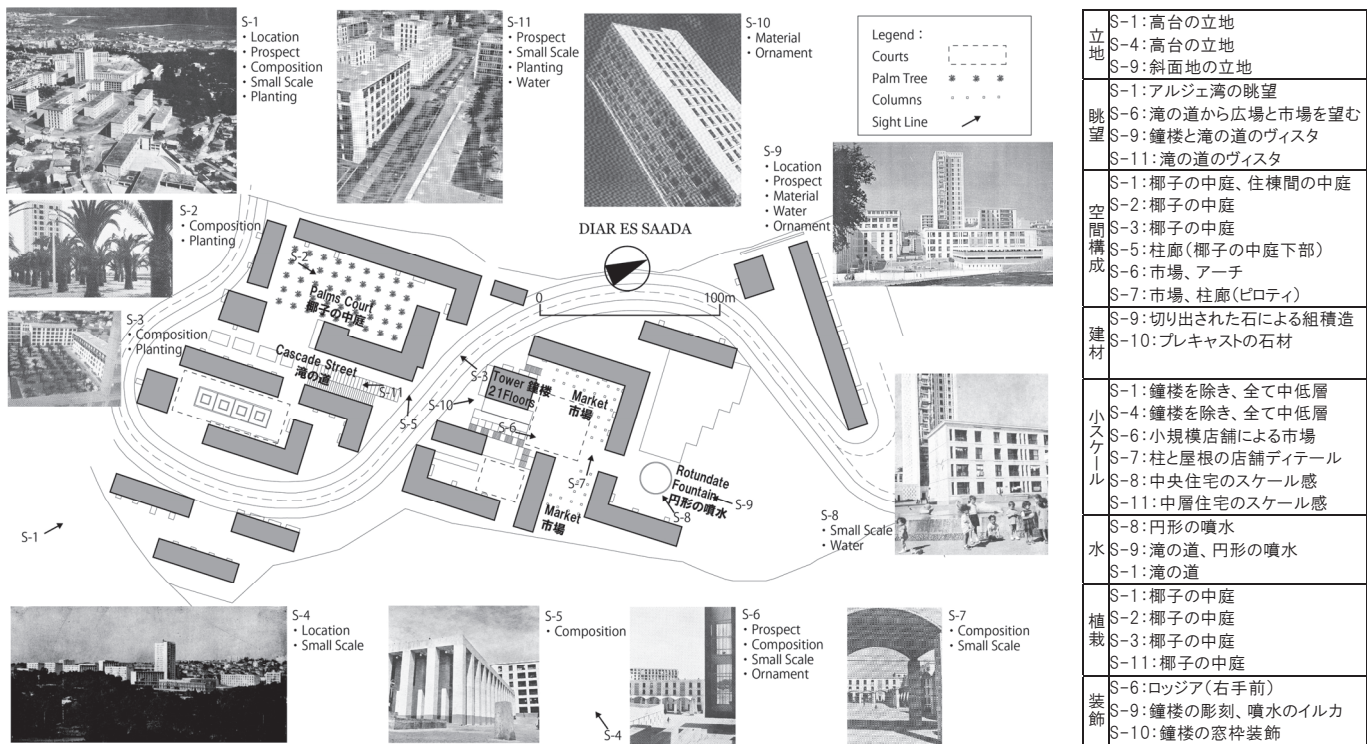


Fig.10 Detailed Analysis of Diar es-Saada from the viewpoints of "Moorish Architecture" ※Photos from *Alger Revue*, S9 photo by G.Banshoya 4)  
BILINGUAL: Location(立地), Prospect(眺望), Composition(空間構成), Material(建材), Small Scale(小スケール), Water(水), Planting(植栽), Ornament(装飾)



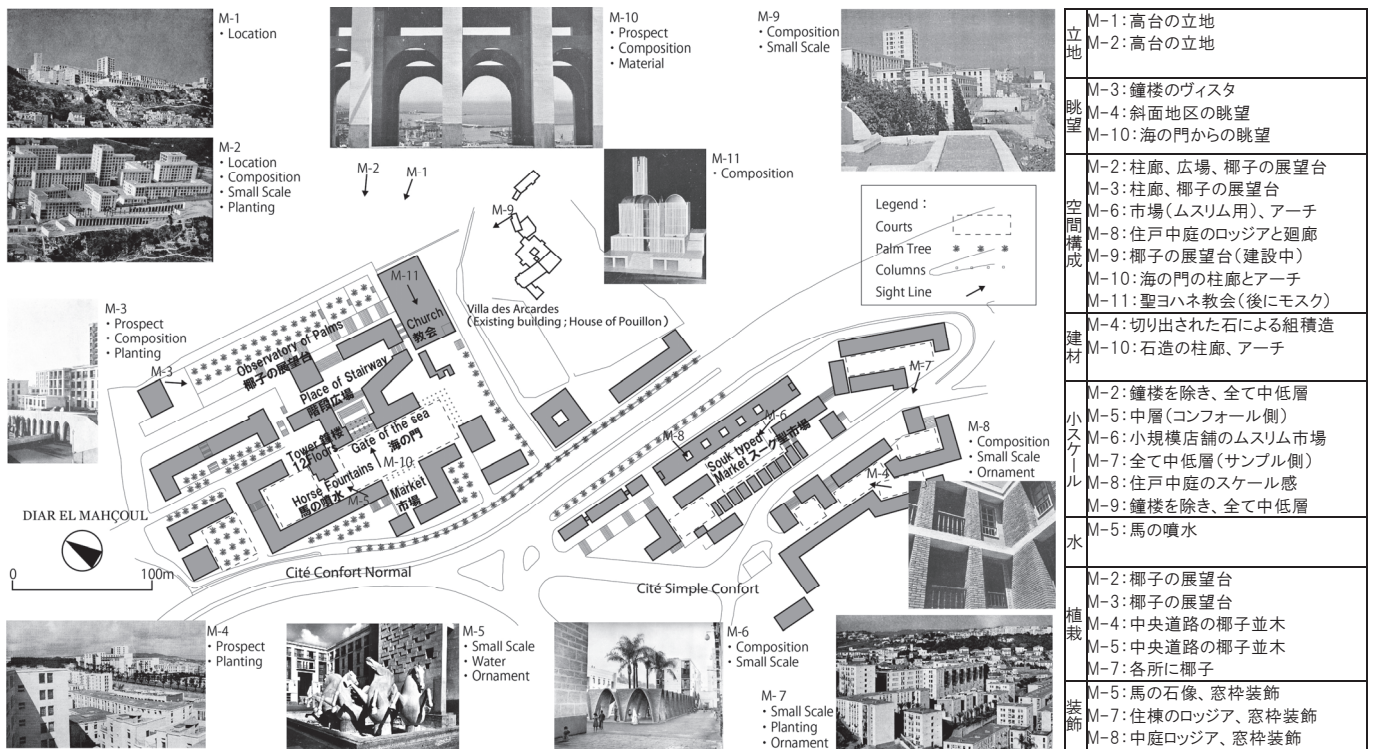


Fig.12 Detailed Analysis of Diar el-Mahçoul from the viewpoints of "Moorish Architecture" ※Photos from *Alger Revue*, M9 photo by G.Banshoya 4)

BILINGUAL: Location (立地), Prospect (眺望), Composition (空間構成), Material (建材), Small Scale (小スケール), Water (水), Planting (植栽), Ornament (装飾)

### 5. 三地区計画のムーア建築の特徴と共生の仕掛け

各地区計画の原盤をベースに、一次資料から得られた当時の各部位の写真を照合し、都市・建築要素を分析する。更に、共生のための建築的仕掛けとして、パルカンの挙げた店舗、工房、庭園、噴水といった要素(2.2)に着目し、空間計画上の位置づけを考察する。

#### 5.1 ディアル=ツサアダ (Fig. 10)

##### 5.1.1 都市・建築要素

アルジェ湾に沿った低地は奥行きが狭く、当時は切り立った斜面地への市街化が進んでいた。ディアル=ツサアダの立地はそうした一つであり、鐘楼上階からはアルジェ湾を眺望できた。滝の道から市場を経て円形の噴水に至るまでが都市軸であり、斜面地を生かした滝に沿って、鐘楼の見えるヴィスタが開けている。住棟間の中庭も大小が存在する。椰子の中庭の下階は住棟であり、大きな柱廊で画されている。鐘楼の真下には市場広場が面している。

街並み全体において、切り出しの石の壁が強くどっしりとした印象を与える。高層棟と呼べるのは意図的に計画された鐘楼一つのみで、全体は3~6階程度の中層住棟からなる団地街である。市場は柱と屋根だけの簡素なもので、台を並べた小さな露店が並ぶ形式であった。機械揚水の滝は南から北への斜面を都市軸に沿って流れている (Fig.11)。椰子の中庭は、規模的にセヴィーリヤやコルドバの大モスクの中庭を想起させ、地区のオアシスと呼ぶにふさわしい。

装飾は簡素で、ロジヤを除くと鐘楼の彫刻、円形の噴水のイルカ等、近代芸術の性格が強い。抽象芸術的な装飾はみられない。

##### 5.1.2 共生の仕掛け

コロンとムスリムの当初割合については、公的には明示されていないが、他の2地区(後述)と比較してみれば、最初に建設され、居住域の区別もなかったディアル=ツサアダでは、コロンが過半を占めたのではないかと考えられる。そうした中、柱と屋根だけから

なる小型店舗が連続する市場は広場に面し、オープンな交流の場であったろう。椰子の中庭や住棟間の中庭では、近隣の住民が毎日のように顔を合わせた。地区一体を結ぶ滝の道は、涼しさと美観を兼ね備えた居心地の良い空間として、路上での会話を支えたであろう。

#### 5.2 ディアル・ル=マフスール (Fig. 12)

##### 5.2.1 都市・建築要素

シテ・コンフォール・ノーマルは海に面した断崖に面し、シテ・サンプル・コンフォールは道路を隔てた内陸側の斜面地に立地する。鐘楼は少し低めの14階建てであるが、サンプル・コンフォールからも視認できた。海の門からの眺望はマルセイユ旧港の復興団地の門を想起させる。コンフォール・ノーマルにおける椰子の展望台、階段広場等の中庭は、規模は大きい数が少なく、対してサンプル・コンフォールにはより小規模な広場が多く存在する。サンプル・コンフォールでは、市場もレンガのヴォールトによる小規模な、天蓋型スークを思わせる形式である。また、住戸の中庭にはロジヤと廻廊が用いられている。すなわち、サンプル・コンフォールの方がより小スケール性が強く、またよりイスラームを意識した意匠に基



Fig.11 Cascade street (post card)



Fig.13 A loggia of Diar el-Mahçoul photo by Nao Makino (2019)



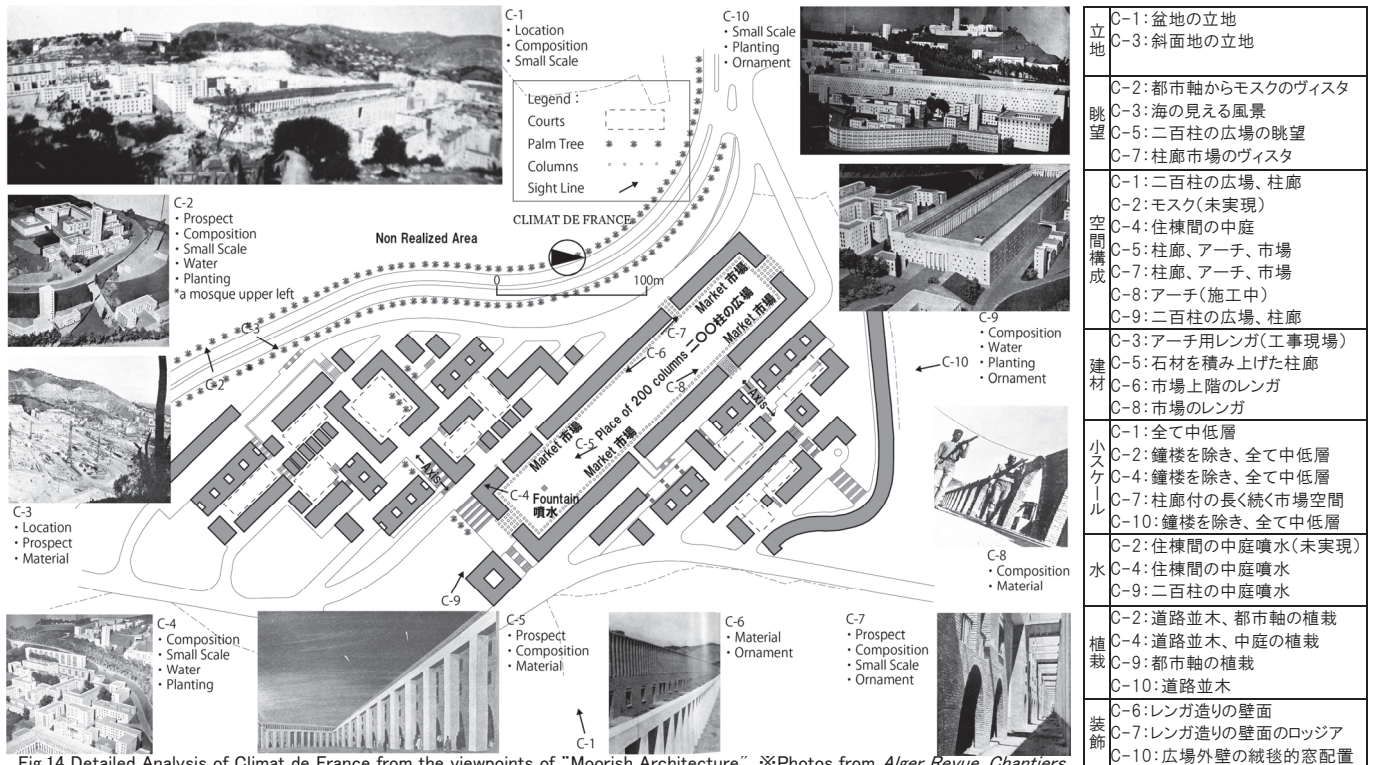


Fig.14 Detailed Analysis of Climat de France from the viewpoints of "Moorish Architecture" ※Photos from *Alger Revue, Chantiers*

BILINGUAL: Location (立地), Prospect(眺望), Composition(空間構成), Material(建材), Small Scale(小スケール), Water(水), Planting(植栽), Ornament(装飾)

づいているといえる。コンフォール・ノーマルにおいては、海の門の柱廊とアーチの構成が、コルドバのメスキータの礼拝室を彷彿とさせる。鐘楼と中低層住棟の構成はここでも確認できる。

水の要素として、コンフォール・ノーマルの大広場に馬の彫刻の噴水が計画されている。椰子の展望台の他、道路並木、また地区内全体に椰子を主とする植栽がみられる。外観イメージは石壁を基調とするが、建物外側に面したロジヤは張り出し式で、イスラム法に規定されたサーバート<sup>18)</sup>のイメージがある (Fig.13)。

### 5.2.2 共生の仕掛け

先述の通り、コンフォール・ノーマルとサンプル・コンフォールに人種の住み分けがあったことに批判がなされている。市場に設定された文化的差異も住み分けの一環とみることができよう。しかし、特徴のある市場はそれぞれ独自の集客力を持つともいえ、そこに交流の契機が生まれたであろう。馬の噴水の広場から海の門を経て椰子の展望台に至る軸線はサンプル・コンフォールからのアプローチに配慮したものといえ、分断の意図はみられない。教会は広場に面してではなく、コンフォール・ノーマルの端部に配置されていた。

## 5.3 クリマ・ドゥ・フランス (Fig. 14)

### 5.3.1 都市・建築要素

竣工は遅れ、中心道路の北側のみ、パイオンが現場を離れた後に実現された。地滑り事故以前の当初計画(前掲 Fig.5)と比較しても、ガルダイヤ旅行の後に発案したとされる二百柱の広場を初め、計画に相違がみられる。写真資料も、施工中のものが多く、研究対象期間中の一次資料としてイメージ図及び模型写真も用いる。概ね竣工していると思われる写真は1957年のシャンティエ誌27号に掲載の一枚 (Fig.14, C-1) のみ存在する。立地は斜面地である盆地であるが、北側に海の眺望も得られている。二百柱の広場の規模は圧巻であり、ローマ建築を思わせる大規模柱廊と併せ、それ自体が優れた眺望と

いえる。また、連続する柱廊の内側にアーチ型の店舗が続く眺望、また二百柱の広場から延びる都市軸からモスクへのヴィスタも計画意図として確認出来る。建材には住棟の外壁及び広場の柱廊に前二地区同様の石材が用いられているが、内側の店舗はレンガ造である。

鐘楼は小規模のものが複数計画されており、他の住棟は3-6階程度の中低層団地地区である。二〇〇柱の広場の柱は大規模であるが、その内側の市場はパイオンが好んで旅したイスファハンのバーザールを思わせる小スケール性が認められる。水については、自伝に「流れと泉についてさらに考えを進める時間ができた」<sup>31)</sup>とあるように、二百柱の広場、住棟間の中庭に複数の噴水が確認できる。植栽としては、道路並木、都市軸に椰子が用いられ、模型上にも散見される。

市場の壁面にロジヤが確認できる。また二百柱の広場の柱廊と、多数の入れ子格子状小窓との組み合わせは、ガルダイヤで特産されるベルベル絨毯の連続パターンのモチーフを、確かに想起させよう。

### 5.3.2 共生の仕掛け

パイオンによれば、計画人口5万人中の4万5千人がムスリムであった。巨大な広場はバーザールのイメージと相まって、地区内はもちろん地区外に対しても集客力を発揮したであろう。また住棟間の中庭も多く、噴水のある庭園として交流の場の役割を果たしていた。未実現のモスクはやはり中央を避け、北端に計画されていた。

## 5.4 「ムーア建築」の特徴からの逸脱点と批判

項目毎に「ムーア建築」の特徴は確かに見出されるといえる。とはいえ、例えばアルハンブラ宮殿に代表される、壮麗で繊細な装飾がみられないことは逸脱点といえる。抽象芸術の背景にあるイスラムが敬遠されたということが、可能性として想起される。また、開かれ植栽された広場と市場を導入する一方、宗派的拠点となる教会やモスクは端部に配置するといった共生の仕掛けも見出された。

しかし、中層団地と住棟間の中庭からなる地区空間は、若干のオ

ーバースケール気味であることが否めない。全ての地区で道路が貫通しており、サービス道路や駐車場が居住エリア内に侵入していることも、「ムーア建築」の稠密空間のイメージから遠ざけている。

これは現前する物的空間の問題だけでなく、アレグザンダーの言う自然成長性としての実現プロセスの欠如に起因するとみるべきであろう。当時の HLM に関する膨大な調査結果から、近代住宅地はそれ自体が生活様式の強要であり、元ビドンヴィル住民には文化的にも経済的にも不可能であったとしたブルデューの報告<sup>注2)</sup>では、ディアル・ル＝マフスールにおいては、居住者がオーナーシップを持ちえず、子供が共用部分を破損するに任せている状況であった。竣工直後の三地区は、まさに「人工都市」の病理に瀕していた。

## 6. 結論

以上、本稿では、パイヨンのアルジェ三地区の計画において「ムーア建築」的であることが標榜され、そのための思索に基づき計画論が構想され、実現空間において一定の反映がなされたことが明らかとなった。地中海沿いの斜面地を活かした眺望は解放感をもたらし、石材による重厚感と、広場、柱廊、市場といった空間構成、水と植栽といった建築・都市要素が盛り込まれた地区は、ヒューマンスケールで文化的な多様性にも優れ、共生の建築的仕掛けをも備えていた。当時のアルジェリアの HLM が、パリのサルセルと同様の無機的な郊外団地ばかりであったことを考えると、特筆すべき建築・都市計画の成果であったことは明らかである。

一方、ブルデューによる批判は近代都市計画一般に妥当し、自然成長性としての離村農民自身によるカスタマイズの萌芽を示し、居住実践の必要性を示唆するものである。しかし、そこに建築・都市計画的な関心は伺われない。当時、政治的アピールの場としても話題の地区であったが故に、かえってディアル・ル＝マフスールの名指しの批判がなされたことは、建築的立場から見れば皮肉である。

同じく伝語圏アフリカであるモロッコでは、1910年代よりアルペール・ラブラドが旧市街のデザイン・サーベイに基づく「ヌーベル・メディナ」を実現し、40年代後半からはミシェル・エコシャールが廉価型中庭住宅「トラム・エコシャール」を実現していた<sup>18)</sup>。キャンディリスの ATBAT の活動も、エコシャールの枠組の中で展開されたものである<sup>22)</sup>。パイヨンは、伝統的な石材と中低層へのこだわりにおいて、ル・コルビュジエを含むこれら CIAM の計画家達と終生相いれなかったが、それにも関わらずその地域性へのまなざしにおいて一脈通じるものを持っていた。ただし、キャンディリスらが、モダニズムがそぎ落としてきた空間の充実を住民自身による増改築に託しており、その意味で自然成長性を意識していたのに対し、パイヨンはあくまで作品として完成された空間を目指していた。三地区は、「ムーア建築」からなる自然都市を計画的に実現しようとしたという点で、アレグザンダーのいう人工都市だったのである。

「全ての都市は植民都市である」というテーゼに立つと見えてくるのは、そもそも(植民地であるか否かに関わらず)計画都市とは、地域の都市の特徴や住まい方の文化を意識的であれ無意識的であれ参照しているという端的な事実である。キャリア上の不幸な挫折を経験したパイヨン<sup>15)</sup>の、アルジェ三地区は、植民地主義批判が言うところの「文化的装い」の範疇を超えた実のあるものであったといえ、建築・都市計画の視点から再評価の余地があるといえよう。

## 謝辞

本研究は、科研費新学術領域研究「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」(18H05449)及び科研費基盤 C「日本の貢献を踏まえた中東・北アフリカ地域の都市計画史—「イスラム都市」論を越えて」(18K04530)に基づき実施されました。

## 注

- 1) 都市計画史の通史として、文献 9 及び 11、24(事典)がある。また筆者による文献 21 では、1.19 世紀植民地都市計画の時代、2.ル＝コルビュジエと CIAM の活動期、3.独立期の都市計画とスラム事業、の 3 期に分け、特に 3.に関わる事項を整理した。
- 2) コロン(Colon)とはフランスを中心とするヨーロッパ系植民者の子孫の、またムスリム(Muslim)とはアラブ人とベルベル人の、当時の一般的な呼称として用いる。
- 3) パラックによるスラムを意味する。ビドン(bidon)とは「ブリキ缶の」を意味する。
- 4) 当該文献では“hispano-maurisque”であり「スパニッシュ・ムーア」と訳せるが、maurisque(ムーア)自体に「スペインの北アフリカ」の意味があるため、本稿では「ムーア」とのみ示し、当該の文脈を踏まえて北アフリカとイベリア半島の様式を意味するものとして用いる。この点について、後述のバルカンは次のように述べており参考とした。Whether it is described as Moorish, Hispano-Islamic or Hispano-Maghrebian, it is clear that none of these attributes does justice to a reality in which Arabic, Spanish and Berber elements subjected each other to mutual influence of varying intensity on the fertile soil of Islam, and in so doing gave rise to unparalleled peaks of achievement. 文献 5, p.18.
- 5) 実際、アルジェリアでは、20 世紀初頭にアーチや天蓋といった装飾を取り入れた様式建築である「ネオ・ムーア建築(neo-Moorish architecture 又は Moorish revival architecture)」が流行していた時期があり、1911 年にはその代表例としてグラン・ポスト(Jules Voinot)及び Marius Toudoire)が実現している。これもムスリムの懐柔という政治目的が背景にあったことが批判的に指摘されているが、「ネオ・ムーア建築」は 19 世紀半ば以降のアメリカとヨーロッパで「ムーア建築」のみならずイスラム建築全般の特徴を取り入れつつ一定の様式化を経た別物であり、パイヨンが標榜した「ムーア建築」と直接の関連はない。文献 13 及び 32。
- 6) 文献 3、及び 21、22。トム・アヴァーマートによる文献 3 では、ATBAT のキャンディリスが直面した住民自身によるカスタマイズについて、「居住実践(dwelling practice)」と定義し肯定的に評価している。“The ATBAT conception took its point of departure from the existing notion of *habitat adapté* and broadened it. Climatological, geographical and geological characteristics were added to the specific cultural aspects of dwelling practices.”。筆者は前報において、ビドンヴィルの形成プロセスの読み解きにおいて「居住実践」概念の応用を試みた。
- 7) 文献 9, p.146. In his view, historic Algiers expressed the presence of two cultures strongly Ottoman and Islamic Spain. とされ、各要素に通りの言及がある。
- 8) 文献 16, pp.347-352. 文献 21 においても踏襲した。
- 9) アルジェ市の広報誌は、パイヨン市長の誕生までブリュタン誌であったが、1954 年 3 月より後継誌であるアルジェ・ルヴュ誌に変更されている。これに伴い紙面が写真中心の読みやすい記事となっているが、議事録の掲載はなくなった。
- 10) パイヨンの自伝(1968:文献 28)の原題は *Mémoire d'un architecte* であり『ある建築家の回想』とでも訳すべきところであるが、本稿では、荒木亨訳(1976)(文献 29)に準じ『石叫ぶべし』とし、訳文テキストを必要に応じて修正しながら用いる。なお本書については、長谷川堯が新建築で紹介している。日本で殆ど知られていないパイヨンの作品を「見てみたい」としながらも「どこかしらの悲しい」と評している(文献 15)。
- 11) 現地における文献収集及び観察調査として、2016 年 2 月にアルジェ、ガルダイヤにおいて松原が、2019 年 11 月にアルジェにおいて松原、日高大志(当時筑波大学大学院生)、牧野奈央(同;Fig.13 撮影者)が実施した。
- 12) 仏文原文は以下の通り。Ces logements sont d'une conception très rationnelle. De plus ils seront d'une authentique originalité puisque M. Fernand Pouillon les adaptera tous au fait géographique algérien en les dotant, chacun, d'un patio inspiré de l'architecture hispano-mauresque.
- 13) 仏文原文は以下の通り。L'élément original et proprement algérien de l'appartement sera précisément la loggia, sortie de pièce ouverte à l'air rappelant le patio hispano-mauresque (mais stylisé). なお、ロジgia(Loggia;イタリア語)とは開廊、バルコニーのことである。
- 14) 本書(文献 5)執筆までに、ラバトに 5 年間滞滞して研究した後、パリ＝ソルボンヌ大学(旧・第四大学)で博士号を取得した。同大教授、名誉教授まで務めた。この他、より建築史的で北アフリカにより多くのページも割かれた文献 7 も参考とした。
- 15) ムスリムによる征服後のキリスト教徒(モサラベ)は、トレド、コルドバ、セヴィーリヤ、メジダ等にコミュニティを持ち、次第にアラブ化、ムスリム化した。また、ユダヤ人はよりムスリム支配に協力的で主に商業に従事したが改宗は拒否していた(文献 5, p.32)。また、レコンキスタ以後、都市社会には、逆転した支配階級たる新興勢力のカトリック教徒と、被支配階級たるモリスコ(カトリックへの改宗を強制されたムスリ



ム)、コンペルソ(同じユダヤ人からの改宗者)とがおり、差別と格差の中で混然一体としていた。多くの既往研究がこれらを一つの「共生」とみなしている。

注 16) 仏文原文は以下の通り。Evidemment, nous sommes favorables à l'exécution de ce projet, mais je tiens tout de même à répondre à la question d'ordre pratique que j'avais posée en Commission des Travaux et Finances: à quelle catégorie seront destinés ces appartements?

注17) 仏文原文は以下の通り。Je considère que tous les hommes, quelle que soit leur origine, doivent être logés et bien logés. Il n'est pas question de créer un habitat spécial pour les habitants d'origine européenne ou pour les musulmans, mais un habitat mixte dans lequel les européennes et les musulmans ayant atteint le degré d'évolution que vous connaissez, pourront cohabiter. Une répartition équitable sera faite entre les uns et les autres.

注 18) シュヴァリエの回答はこの後も続き、特に「進化」の具体的内容を示すキーワードとなる「再定住住宅(Cité de Recasement)」について説明がなされている。しかしパイオンの三地区に直接の関連がないことから本稿では踏み込まず、主題的な検討は番匠谷堯二の再定住住宅と居住実践を扱う次報に譲りたい。

注19) 仏文原文は以下の通り。Cet appartement-type sera destiné à tous les éléments de la population, français, européens ou musulmans.

注 20) 例えば、チェルクによる文献 9, pp.144-147。

注 21) この時点でシュヴァリエはマンデス=フランス内閣の国防長官(後に国防大臣)に任命されており、アルジェ市長を兼ねた政府高官の立場となっている。

注 22) 8月4日は封建的特権の廃止を決議したフランス革命の記念日の一つであったが、1953年以降、シュヴァリエ市政により都市政策にまつわる記念日となっていた。

注 23) ミッテランは戦前にヴァシー政権の傾倒者でありながらド・ゴールの臨時政府で重要されたリベラル派の政治家であった。後に社会党から大統領となる。

注 24) 独立運動が武力闘争に移行したのは、ミッテラン訪問から数週間後の1954年11月1日(万聖節)のFLN(Front de Libération Nationale; アルジェリア民族解放戦線)の蜂起がきっかけであった。ド・ゴールの大統領就任に伴う1958年10月4日のフランス第四共和政の崩壊もアルジェリアの独立と密接に関連したものである。文献 17, pp.71-82。アルジェを舞台とする凄惨なテロの応酬についても詳しい。

注 25) 文献 1, p.72。仏文原文は Force-les de bâtir ensemble une tour et tu les changeras en frères であり、シュヴァリエの引用文もこの通りである。

注 26) 文献 29, 32 ページから 182 ページを引用・分析対象とする。

注 27) ポン・デュ・ガール(Pont du Gard;ローマ橋)から南東に約30キロの町。

注 28) 5月11日の議事録に記録されたパイオンに二度目のアルジェ訪問であった。

注 29) 17世紀の伝統的邸宅で、1815年にアメリカ海軍により殺害された海賊ライース・ハミドゥ(Rais Hamidou)の夏の別荘であった。文献 30, pp.88-91。

注 30) MRU のピエール・ダロズ(Pierre Daloz; 1899-1992)を局長として、1953年に発足していたアルジェ市の諮問機関である。パイオンの招聘と並んで、シュヴァリエ市政のもう一つの目玉であった。54年より番匠谷堯二が所属した。

注 31) 文献 29, p.167。また、処理水を飲めるか尋ねる等、水の確保に熱心であった。

注 32) 文献 8。終盤の「近代的住居と家計」(pp.130-143)において、人口統計的な基礎データが概括されている。そのうえで、「都市的生活様式の矛盾」(pp.144-153)において、ディアルル=マフスールに関する注記を含む総論的な議論をしている。

## 参考文献

- 1) Antoine de SAINT EXUPERY : *Citadelle(Citadel)*, Misuzu shobo, 1985. (in Japanese) 山崎庸一郎(訳):城砦 1(サン=テグジュペリ著作集), みすず書房, 1985
- 2) Alexander, Christopher: *The Nature of Order-An Essay on the Art of Building and the Nature of the Universe- Book one The phenomenon of Life*, Kajima Shuppankai, 2013.(in Japanese) クリストファー・アレグザンダー 中埜博(監訳):ザ・ネイチャー・オブ・オーダー 建築の美学と世界の本質 生命の現象, 鹿島出版会, 2013.
- 3) Avermaete Tom: *Another Modern. The Post-War Architecture and Urbanism of Candilis-Josic-Woods*. Rotterdam: NAI Publishers; 2006.
- 4) Banshoya, Gyoji: Algeria no Apart (Aparts in Algeria), *Kenchikukai*, 2-7, 1955.12 (in Japanese) 番匠谷堯二:アルジェリアのアパート, 建築界, pp.2-7, 1955.12.
- 5) Barucand, Marianne and Achim Bednorz: *Moorish Architecture in Andalusia*, Taschen, 1999.
- 6) Bedarida, Marc : *Fernand Pouillon*, Editions du Patrimoine, 2012.
- 7) Bloom, Jonathan B : *Architecture of the Islamic West -North Africa and the Iberian Peninsula, 700-1800*, Yale University Press, 2020.
- 8) Bourdieu, Pierre : Shihon-shugi no Habitus (Algeria 60: Economic and temporal structures). Fujiwara shoten. 1993.(in Japanese) ピエール・ブルデュー, 原山哲他(訳):資本主義のハビトゥス, 藤原書店, 1993.
- 9) Çelik, Zeynep: *Urban Forms and Colonial Confrontations: Algiers Under French Rule*, University of California Press, 1997.
- 10) Çelik, Zeynep: "Bidonvilles : CIAM et grands ensembles(Slums; CIAM and grands ensembles)." In *Alger, paysage urbain et architectures, 1800-2000(Algiers, urban landscape and architectures, 1800-2000)*, edited by Jean-Louis Cohen, Nablia Oulebsir,

- and Youcef Kanoun, 186-227. Besançon, Les éditions de l'imprimeur, 2003.
- 11) Cohen, Jean-Louis, Nablia Oulebsir, and Youcef Kanoun (ed.), *Alger, paysage urbain et architectures, 1800-2000*, Besançon, Les éditions de l'imprimeur, 2003.
- 12) Daphné, Bengoa : *Fernand Pouillon et l'Algérie: Bâtir à hauteur d'hommes(Fernand Pouillon and Algeria: Building at the height of human)*, Macula Éditions, 2019.
- 13) Graebner, Seth : Contains Preservatives: Architecture and Memory in Colonial Algiers, *Historical Reflections*, Vol. 33, No. 2, pp. 257-276, 2007.
- 14) Gruet, Stéphane : *Fernand Pouillon : Humanité et grandeur d'un habitat pour tous(Fernand Pouillon : Humanity and grandeur of a habitat for all)*, Editions Poésis, 2013.
- 15) Hasegawa, Takashi : Sugishi Jidai eno Banka(An Elegy for a Bygone days), *Shin Ken-Chiku*, 52-3, p.266, 1977.3. (in Japanese) 長谷川堯:過ぎし時代への挽歌, 新建築, 52 巻 3 号, p.266, 1977.3.
- 16) Home, Robert : *Of Planting and Planning : The making of British colonial cities*, Kyoto university press, 2001. (in Japanese) ロバート・ホーム 布野修司他(訳):植えつけられた都市, 京都大学出版会, 2001.
- 17) Home, Alistair : *A Savage War of Peace: Algeria 1954-1962*, Daisanshokan, 1994.(in Japanese) アリスティア・ホーム, 北村美都穂(訳):サハラの砂、オーレスの石, 第三書館, 1994.
- 18) Matsubara, Kosuke: *Morocco no Rekisho Toshi Fes no Hozen to Kindaika (Conservation and Modernisation of the historic city of Fez, Morocco)*, Gakugei Shuppansha, 2008. (in Japanese) 松原康介: モロッコの歴史都市 フェスの保全と近代化, 学芸出版社, 2008.
- 19) Matsubara, Kosuke: Gyoji Banshoya (1930-1998): A Japanese planner devoted to historic cities in the Middle East and North Africa, *Planning Perspectives*, 31-3 (April 2016), pp. 391-423, 2016.
- 20) Matsubara, Kosuke: Formation and Change of an International Exchange Organization ATBAT, *Journal of Architecture and Planning* (Transactions of AIJ), Vol. 82, No. 742, pp. 3239-3249, 2017.12 (in Japanese) 松原康介:国際交流組織ATBATの結成と変容, 日本建築学会計画系論文集, 第82巻, 742号, pp.3239-3249, 2017. 12.
- 21) Matsubara, Kosuke: Algiers, Transition of Colonial Urbanism -Locality of the Modernism, *Journal of Urban and Territorial History*; No. 5, pp. 55-65, 2018. (in Japanese) 松原康介:アルジェ・植民都市の変遷 -モダニズムの地域性, 都市史研究, 5, pp.55-65, 2018.
- 22) Matsubara, Kosuke: Balcony of G.Candilis, Transition in the Slum, *Journal of Architecture and Building Science*, vol.134, No.1722, p.47, 2019. (in Japanese) 松原康介:スラムに転化したキャンディリスのバルコニー, 建築雑誌, vol.134, No.1722, p.47, 2019.
- 23) Matsubara, Kosuke: Formation and Change of an International Exchange Organization ATBAT, *Journal of Architecture and Planning* (Transactions of AIJ), Vol. 84, No. 760, pp. 1473-1483, 2019. 06. (in Japanese) 松原康介: 戦後仏語圏における「最大多数のための住まい」から「進化した住宅」への展開, 日本建築学会計画系論文集, 第84巻, 760号, pp.1473-1483, 2019. 6.
- 24) Matsubara, Kosuke: Algiers, Minami Chichukai no Façade (Algiers, Façade of The south Mediterranean Sea) in Funo, Shuji: *Seikai Toshi shi Jiten (Encyclopedia of Global History of Cities)*, pp.444-445, Showado, 2019. (in Japanese) 松原康介:アルジェ 南地中海のファサード, 布野修司(編)『世界都市史事典』, pp.444-445, 昭和堂, 2019.
- 25) Matsubara, Kosuke: Ghardaïa, M'zab no Tani no Shiroi Oasis (Ghardaïa, Whoite Oasis of the M'zab Valley ) in Funo, Shuji: *Seikai Toshi shi Jiten (Encyclopedia of Global History of Cities)*, pp.446-447, Showado, 2019. (in Japanese) 松原康介:ガルダイア ムザブの谷の白いオアシス, 布野修司(編)『世界都市史事典』, pp.446-447, 昭和堂, 2019
- 26) Matsubara, Kosuke: Some learnings Gyoji Banshoya acquired from the spatial composition of the ancient shantytown of Mahieddine, in 1950's Algiers: Research on dwelling practice around the "bidonville (shantytown)" project in Algiers during the Late Colonial Period, Part 1, *Japan Architectural Review*, Volume4, Issue2, pp.343-355, 2021.4.
- 27) Mohamedi Louiza et al., Fernand Pouillon's Heritage: Modernization of old construction methods, *International Journal of Human Settlements*, vol.2, no.3, pp.52-61, 2018.
- 28) Pouillon, Fernand: *Memoires d'un architecte(Memories of an architect)*, Paris, Edition du Seuil, 1968.
- 29) Pouillon, Fernand and Toru Araki: *Ishi Sakebu Beshi (The very stones would cry out)*, Bunwashobo, 1976 (in Japanese) フェルナン・パイオン 荒木亨(訳):石叫ぶべし, 文和書房, 1976.
- 30) Vidal-bue, Marion : *Villas et Palais d'Alger du XVIIIe siècle à nos jours(Villas and Palaces of Algiers from the 18th century to today)*, Place des Victoires, 2014.
- 31) Voldman, Danièle : *Fernand Pouillon, architecte*, Payot, 2006.
- 32) Watanabe, Shoko : Shokuminchiki Koki Algier no Kasbah no Image (Images of the Kasbah in Late Colonial Algiers) in Yamada, Shigeo: *The Essence of Urban Civilization 3*, pp.303-322, 2021. (in Japanese) 渡邊祥子:植民地後期アルジェのカスバのイメージ, 山田重郎(編):都市文明の本質 3, pp.303-322, 2021.

RESEARCH ON DWELLING PRACTICE AROUND THE “BIDONVILLE (SHANTYTOWN)” PROJECTS  
IN ALGIERS DURING THE LATE COLONIAL PERIOD, PART 2 :  
AN EXAMINATION OF THE THREE DISTRICTS IN ALGIERS BY FERNAND POUILLON AS  
MOORISH ARCHITECTURE

*Kosuke MATSUBARA* \*<sup>1</sup>

\*<sup>1</sup> Assoc. Prof., Faculty of Engineering, Information and Systems Division of Policy and Planning Sciences, University of Tsukuba, Ph.D.

During the French colonial period (1830–1962), Algeria saw the introduction of modern architecture and urban planning, particularly in Algiers. In the late colonial period, however, the most pressing issue was the coexistence of the ‘Colons’, who had lived in the country for several generations, and the original inhabitants ‘Muslims’. The late colonial period pertains to when Jacques Chevalier, who was elected mayor on the promise of ‘coexistence’, was in charge of the city of Algiers from May 1953 to May 1958 and promoted the type of urban planning he had assured. The French architect Fernand Pouillon was invited for ‘coexistence’ urban planning and realised the ‘three districts’ of Diar es-Saâda (1953), Diar el-Mahçoul (1954), and Climat de France (1959). One of the concepts of the three districts was ‘Moorish architecture’ (*hispano-maurisque*)—a fusion of Roman and Islamic elements—which developed in the Iberian Peninsula and the Maghreb region. Indeed, Pouillon tried to reflect on the unique spatial characteristics of the region as a living space for Algerians, including Muslims. However, such attempts have often been criticised for their limitations.

The purpose of this study is to clarify the characteristics of the three districts of Algiers, as officially advocated by Pouillon, by critically examining the location of each district, spatial composition, urban architectural elements such as ornament, the idea of symbiosis, and the process from planning to realisation. This study is a historical research. Primary sources include the minutes of the city council meetings of the time, texts, photographs, and drawings published in the city's public relations magazines and articles in architecture magazines. Additionally, several magazine articles by the Japanese Banshoya Gyoji, who was in Algiers at the time, will be used as the primary source for this paper.

First, I will summarise the existing studies on Moorish architecture, especially the book, ‘Moorish Architecture in Andalusia’ and construct and present an analytical concept for the evaluation of the three districts (Chapter 2). As for the process from planning to realisation, I will use the minutes of the city council meetings published in the *Bulletin Municipal de la ville d'Alger*, articles on urban planning in the *Bulletin* and its successor, *Alger Revue*, as well as architecture-related sources such as *Chantier* and other architectural magazines (Chapter 3). This is then supplemented by Pouillon's autobiography, ‘*Mémoire d'un architecte*’, which is rich in content and contains his subjective but more concrete spatial ideas and value judgments (Chapter 4). As for the planning analysis, based on the above-mentioned primary data, the plan of each district is modified to create a base map, and then the photographs of each part are compared and analysed item by item (Chapter 5). In conclusion, it is clear that Pouillon advocated ‘Moorish Architecture’ in the three districts of Algiers. The planning theory was conceived based on this thought, and it was reflected to a certain extent in the realised space. The view from the slopes affronted by the Mediterranean Sea was liberating. The stone was massing, the spatial organisation of the square, the colonnade, and the market were organised on a small scale, the water and the planting were well equipped, and the human scale space and the diversity of the district were assured.

(2021年3月10日原稿受理, 2021年7月28日採用決定)